

機関番号：12501  
 研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2008 ～ 2010  
 課題番号：20530434  
 研究課題名（和文） 自己論の観点からの社会学史の再構築  
 研究課題名（英文） Reconstruction of the History of Sociology from the Viewpoint of  
 Self-theory  
 研究代表者 片桐 雅隆 (Katagiri Masataka)  
 千葉大学・文学部・教授  
 研究者番号 90117937

## 研究成果の概要（和文）：

本研究は、自己がどのように語られてきたかという観点から社会学の歴史を記述したものである。近代的個人、共同体的自己、大衆、対抗的アイデンティティ、私化する自己、再帰的自己、リキッドなアイデンティティ、心理化する自己を順次取り上げる中で、近代初期の時代から現代社会に至る社会変動の動態を、個人化、私化、心理化をキーワードとして描いた。

## 研究成果の概要（英文）：

This research describes the history of sociology from the viewpoint how selves have been narrated by main sociologists. In order to do so, we took up modern individual, communal self, the masses, alternative identity, privatized self, reflexive self, liquid identity and psychologized self. Through taking up these selves, we described the social change from early modern time to contemporary society by using keywords such as individualization, privatization and psychologization.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学史

キーワード：社会学・社会学史・自己・個人化・私化

## 1. 研究開始当初の背景

自己論は従来、心理学や哲学の研究領域とされ、社会学の分野では中心的に論じられてこなかった。しかし、近年になって西欧やアメリカの社会学を中心として、社会学的な自己論の展開が盛んである。報告者は、これらの自己論の研究動向をふまえつつ、シンボリック相互行為論や現象学的社会学の理論的な視点に立ちつつ、自己論の理論的な展開を試みてきた。また、一方、そのような理論的な視点に立ちつつ、またその視点を生かして、現

代社会における自己のあり方を探求し、また同時にその作業を通して現代社会のあり方を探求してきた。報告者は現代社会のあり方としての個人化や私化の現象に注目してきた。今回の研究は、社会学の歴史の中で、自己の問題がどのように扱われていったかを問うものであり、換言すれば、社会学史を自己論の観点から再構成しようとするものである。その研究は、応募者の従来の研究、つまり自己への理論的な研究と現代的な自己のあ

り方についての研究をふまえ、それらの観点から社会学史研究の上で統合しようとする試みでもある。

## 2. 研究の目的

本研究は、自己をキーワードとして、自己論の観点から社会学の歴史を位置づけ、社会学の歴史に一貫した筋道を求めることを目指している。それは、2つの大きな目標を持っている。1つは、そのあり方や方向性が見えづらい社会学の状況の中で、一貫した視点から社会学史を書くことで社会学のアイデンティティのあり方を呈示することであり、もう1つは、そのような作業をとおして自己の社会学を確立することである。つまり、自己論の視点から社会学史を書くことで、従来必ずしも中心的なテーマとはされてこなかった自己の問題を、社会学や社会学史の中に置くことによって、自己の社会学を確立することである。

## 3. 研究の方法

(1) 研究計画の1つは、文献の収集と解説である。近代的個人については、ウェーバー、デュルケム、ジンメルの基本文献や二次的論文、共同体的自己についてはクーリーとミードを中心に扱った。大衆については、ヨーロッパの大衆社会論としてマンハイム、アリエスらのヨーロッパでのファシズム研究を取り上げ、またアメリカの大衆社会論としては、ミルズ、コーンハウザー、リースマンらを取り上げた。そしてさらに、対抗的アイデンティティとしては、シンボリック相互行為論の集合行動論を、そして私化する自己に関しては、アメリカ在住の社会学者のバーガーを中心に取上げた。一方ヨーロッパで主に展開されてきた再帰的自己に関しては、ギデンズやベックを、リキッドなアイデンティティに関してはバウマンを取り上げた。最後に心理化する自己に関してはヒューイットとローズを取り上げた。これらの社会学者などの文献をとおして自己論の観点からの社会学史を構築することが、第1の研究方法である。

(2) 第2の研究方法は、文献研究に加えて、海外、国内の研究者と意見交換や共同研究を行うことである。報告者は、とくにオーストラリア・フリンダース大学のエリオット教授を中心とする研究グループと、自己論をめぐる共同研究を行ってきた。そのような共同研究をとおして、本課題の研究を促進するために、相互の訪問による意見交換、研究会やシンポジウムの開催を行った。

## 4. 研究成果

本研究は、『自己の発見—社会学史のフロンティア』として平成23年1月に世界思想者から出版されている。研究成果として、本書の内容に沿って記述したい。

(1) 第1章「近代的個人」では、ヨーロッパでの社会学の確立期に生きた、デュルケム、ジンメル、ウェーバーの近代的な人間像をとりあげた。彼らの関心は、「個別的な社会」から「普遍的な社会」への移行に伴って、社会や人間がどのように変化したかを問うことにあった。つまり、19世紀後半から20世紀前半にかけて、産業化や国家の形成を背景として、個別的な村落共同体から、さまざまな異質な人びとによって構成される都市的な社会への移行に伴う社会変化の解明が、彼らの最大の関心であった。デュルケムやジンメルは、そうした社会の変化のなかで、人間そのものや労働者というカテゴリーの成立を人間観の大きな変化として発見した。つまり、共同体の個別的な属性を背負うものではなく、より普遍的で一般化された人間、という概念の成立に近代的な個人の特徴を見ようとしたのである。そうした視点は、ウェーバーにおいては、「形式合理性」の概念に見ることができる。

(2) 第2章「共同体的自己—クーリーとミード」では、クーリーとミードを取り上げた。かれらも、デュルケム、ジンメル、ウェーバーとほとんど同じ時代を生きた。しかし、アメリカ社会はヨーロッパの社会と違い、近代における、個別的な村落共同体から普遍的な都市社会への移行をいかに描くか、という課題は希薄だった。むしろ、さまざまな異なる文化的な背景をもつ移民が混住する社会の中で、いかにそれらの違いを乗り越えて普遍的で一般化された社会を形成するか、に彼らの関心があった。クーリーは、「第1次集団」を発見しそれが危機にあることをとおして、混住社会の困難を語り、ミードは、「一般化された他者」という概念によって、普遍的な社会の可能性を問おうとした。また、彼らに研究の意義は、社会学においてはじめて本格的な自己論を展開したことにもある。

(3) 第3章「大衆—戦前から戦後へ」では、第2次世界大戦前から戦後にかけて展開された大衆社会論を検討した。ヨーロッパでの大衆社会論として、マンハイムとフロム、そして、アメリカの大衆社会論として、ミルズとリースマンを主に取上げた。ヨーロッパの大衆社会論は、ファシズムの解明という点で、

アメリカの大衆社会論とは大きく違っている。マンハイムやフロムは、社会心理学や精神分析などの知見を参照しながら、ファシズム下での人間を描いた。その構図は、媒介的関係の解体によって個人が国家に対して無力な存在になる、というものであった。一方、ヨーロッパの大衆社会論が、40年代を中心に戦前のファシズムを背景として展開されたのに対して、アメリカの大衆社会論は戦後、主に50年代に展開された。同じく、媒介的関係の解体を、社会を読み解くキーワードとしながら、ミルズは、そこに疎外され、パーソナリティを切り売りする、ホワイトカラーを見いだし、リースマンは、私的領域に固有な意味を見いだす新たな人間像を見いだそうとした。こうした大衆社会論は、ヨーロッパ種のものであれ、アメリカ種のものであれ、普遍的な社会や人間のあり方の困難性を露見させるものであった。

(4) 第4章「対抗的アイデンティティー60年代の集合行動論」では、シンボリック相互行為論の集合行動論を取り上げた。1つは、パーク、ブルマー、ラングらの集合行動論、もう1つは、クラブやターナーらの対抗文化を背景とした集合行動論を対象にした。前者を取り上げたのは、その集合行動論が大衆社会論として読めること、つまり、従来、大衆社会論は第3節でとりあげた議論が主要なものとされてきたが、第3の流れとして集合行動論を位置づけることができることを、指摘するためである。そして、後者の集合行動論には、大衆社会論とは異なる自己の語りの登場を見ることができる。後者は、アメリカの60年代という対抗文化を背景として、新たな自己が登場したことを明らかにした。クラブは、その傾向を「集合的なアイデンティティの探求」として、ターナーは「制度的な自己」から「衝動的な自己」への移行として描いた。ミルズやリースマンにおけるように、50年代でのアメリカの大衆社会論は、大衆を疎外された人間と見ることから、私的領域に閉ざされつつも、そこに新たな関係のあり方を見いだしていった。その方向は、次の私化論に引き継がれていく。対抗的アイデンティティとして自己を見いだした60年代の集合行動論は、両者の狭間にあるその時代に固有な自己のあり方を描いた。

(5) 第5章「私化する自己ー私化する自己・ナルシス的自己・共同体主義の自己」では、70年における、バーガーとブリタンの私化論、セネットとラッシュのナルシズム論、

そして、80年代以降に展開された、ベラーとエティオーニの共同体主義（コミュニタリアニズム）の自己論を取り上げた。70年代に展開された私化論の構図は、媒介的関係が解体し、人びとの関心が公的領域から離れ、私的領域に収斂していく、とう点では大衆社会論と同じである。ブリタンはそこに自己の断片化を見ようとしたが、バーガーは、むしろ新たな社会関係や自己の可能性を見ようとした。

しかし、私化現象を、社会の解体として批判的にとらえ、共同体の記憶に支えられた物語を背景とする、共同体を背景とする自己の復権を求める動きが、同じ時代に登場する。それが、ナルシズム論であり、共同体主義である。両者の当てる焦点は異なるが、目指すところは共通している。なぜなら、ナルシズム論は、自己を位置づける枠組としての理想などの大きな物語が解体し、自己の欲望が枠を外れて肥大化したことを指摘するが、それは、裏を返せば、共同体主義と同様に、物語に根ざす自己の復権を主張する根拠となっているからである。

(6) 第6章「再帰的自己ーギデンズとベック」では、ギデンズとベックの社会学を、自己論に焦点を当てながら取り上げた。ギデンズは、「時間と空間の分離」や「離床化（脱埋め込み）」によって、また、ベックは、「第1の近代」から「第2の近代」への移行、によって、現代社会が、個別的な原理から、グローバルで普遍的な原理によって作られた社会に移行したことを指摘する。自己論的に見れば、それは、家族や職場、地域社会や国家などの個別的な、自己を位置づける枠組みが希薄となり、そうであるがゆえに、自己は自らのあり方をつねに再帰的に問い続けなければならない、ことを意味している。そうした個人化という社会現象は、デュルケームらの社会学の確立期のひとたちが見いだした、人間というカテゴリーによって成り立つ社会、という見方の延長にある。しかし、デュルケームらの時代には、人間というカテゴリーが見いだされたとしても、それは、家族や国家などの個別的な枠組みを背景としていたが、第2の近代としての現代社会では、それらの枠組がさらに希薄化し、個人という存在がより顕在化していった。そうした個人化は、リスクの個人化に見られるように、確かに、人間を孤立させ不安にさせる。しかし一方で、ギデンズやベックは、そこに、制度的な枠組にとらわれない人間のあり方や、新しい社会運動に見られるような新たな社会の可能性を見

ようとした。

(7) 第7章「リキッドなアイデンティティと心理主義化する自己—深化する自己言及化の語り」では、バウマンの「リキッドな近代」やアイデンティティについての議論、ヒューイットとローズの「心理学化する社会」論を取り上げた。リキッドな近代論は90年代以降のグローバリゼーションの進展と深く結びついている。バウマンのリキッドな近代論はベックの第2の近代の特徴とも重なるが、バウマンは、そうした背景で、アイデンティティがますます断片化していくことに注目する。バウマンは、「アンビヴァレンス」という概念を、管理社会としての近代社会を相対化するキーワードと考えたが、それは、リキッドな近代では、むしろ、アイデンティティを不安にさせる原理に転化する。

一方、自己を位置づける枠組みが、大きな物語から自己そのものによって変わっていくこと、つまり自己の語りの自己言及化の極は、「心理学化する自己」に見ることができる。心理主義化する自己とは、公的にせよ私的にせよ、さまざまな事柄や問題を、社会的な属性に帰属することで解釈したり、解決したりするのではなく、心や精神的な属性に帰属させる自己のあり方を示している。

(8) 終章「自己の発見から、再び社会の発見へ」で書こうとしたことは、自己のあり方への問いが、社会のあり方への問いと結びついていることである。第1章から第7章まで見てきたように、自己を位置づける枠組としての他者はますます縮小している。自己言及化とは、そうした他者が自己そのものとなったことを意味している。これらの動きに対して、第5章で見たように、物語に根ざす自己の復権を求める共同体主義の動きや、それに対して、普遍的な人間性や自己に社会の原則を求めるリベラリズムの動きを見ることができる。そうした動きの可能性や限界を指摘した後で、最後に、エリオットらの新しい個人主義論に依拠しながら、自己の語りが自己言及化するなかで、それに対応する新たな社会の構築の原則がどこにあるかを展望した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

①A. エリオット・片桐雅隆・澤井敦、新しい個人主義と現代日本、現代社会学理論研究、特集論文、4巻、67－92頁

〔学会発表〕(計1件)

①A. エリオット・片桐雅隆・澤井敦、新しい個人主義と現代日本、日本社会学理論学会、2010年9月、千葉大学

〔図書〕(計1件)

①片桐雅隆、世界思想社、自己の発見—社会学史のフロンティア、2011年、273頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

片桐雅隆 (Katagiri Masataka)

千葉大学・文学部・教授

研究者番号：90117937

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：